日本語知覚補文テンスについての覚書き

－日英語の歴史的現在用法との関連において－(1)

尾　野　治　彦

目　　次

0．序
1．聴覚と視覚におけるル形とテイル形
　　－知覚における認知のあり方をめぐって－（本号）
2．澤田（1997）の問題点をめぐって（以下次号）
3．歴史的現在用法におけるル形
4．英語における歴史的現在用法

0．英語の基本構文の一つに知覚構文というものがあるが、これについては、次のような英文と日本語訳がそえられるのが普通である。

(1)　a．I *saw* John cross the street.
　　（私はジョンが通りを渡るのを見た。）
　　［完了］
　　b．I *saw* John crossing the street.
　　（私はジョンが通りを渡っているのを見た。）
　　［進行中］

このように、一般に、原形不定詞の場合は動作が〈完了〉したことを表し、現在分詞の場合は動作が〈進行中〉であるという意味が含まれる。（安藤 1986：365）

もちろん、この［完了］・［進行中］という違いはあくまで、英語の知覚構文の原形不定詞と現在分詞の違いについてであって、日本語のル形とテイル形を問題にしたものではない。しかし一般的には（1）のような英語の知覚構文における原形不定詞と現在分詞の違いはそのまま日本語の訳文にもあてはまり、（1a）の「渡る」のル形が「完了」を表し、（1b）の「渡っている」のテイル形が「進行中」を表すと考えられているようである。[1]

しかし、このように、ル形とテイル形の意味の違いがはっきりでるのは「通りを渡る」が「完成動詞（accomplishment verb）」であるからであり、「走る」のような「動作動詞（activity verb）」であれば事情は異なってくる。

（2）　a．太郎には花子が走るのが見える。
　　b．太郎には花子が走っているのが見える。

このような場合には、「走る」と「走っている」の差異を「完了」と「進行中」の違いでとらえることはできず、『……それを完結相でとらえようが、非完結相でとらえようが、事象の真偽は変わらない（町田 1989：104）。』とされている。そのためか、このような知覚補文におけるル形とテイル形の違いについては、これまでほとんどふれられることがなかったように思われる。§2で扱う澤田（1997）においても、このようなル形、テイル形の違いについては何等問題とされていない。しかし、このような一見何の違いがないと思われる場合であっても、ルとテイルに何等かの違いは表れているというべきであって、「完了」と「進行中」の概念をも包み込むよ

り大きな、ル形とテイル形の枠組みが求められると思われる。

本稿ではまず、§1で、聴覚と視覚を表している具体例を見ることによって、日本語の知覚補文におけるルとテイルの使い分けの要因について、「知覚」と「観察」[2] の観点からこの問題の考察を試みるが、あわせて、聴覚と視覚の知覚の認知のあり方の違いについてもふれる。§2では、本稿と関連あるテーマを扱っている澤田（1997）の「日本語知覚補文のテンスの解釈」の問題点を指摘する。

また、日本語のル形とこのル形に相当する英語の単純現在時制には、「過去の一連の出来事を、あたかも読者の眼前で起こっているように生き生きと描写する」とされる「歴史的現在」の用法がある。この用法は日本語においてはよく見受けられるものであるが、英語では、もっぱら、単純現在時制の例外的な用法としてしか扱われていないように思われる。§3においては、曾我（1984）を手掛かりに、この歴史的現在のル形の用法を、知覚補文のル形との関連においてとらえてみたい。§4では、本稿での歴史的現在用法に対するとらえ方が、英語の歴史的現在用法にもあてはまるかどうか検討する。

1．以下、§1．1では、聴覚と視覚におけるル形とテイルの用例を「知覚」と「観察」の観点から考察する。あわせて、聴覚と視覚の知覚のあり方の違いについても考察する。更には感覚を表す知覚の用法についてもふれる。§1．2では、「移動する知覚主体」と「持続する知覚」のル形の用法について考察する。§1．3では、(1) の「完了」と「進行中」を表すル形とテイル形を本稿での観点から見直すことにする。

1．1．まず、この問題の考察の手掛かりとして、寺村の観察を考察することからはじめたい。寺村（1984）には、「連体修飾節のテンス・アスペクト」の中の「主節の時と同時であることを表わす基本形」のセクション

に次のような記述がある（寺村 1984：196）。

(3)　被修飾名詞が、視覚、嗅覚、聴覚など、感覚によって捉えられるような対象を表わす名詞、たとえば次の（41)(＝4）のような名詞であるときは、その内容を表わす修飾節の述語は基本形になるのがふつうである。～テイルという形になることもあるが、基本形の場合のほうが多い。

(4)　姿、音、絵、匂い、感じ……

このあとに4つの例文があげられているが、ここでは、とりあえず、次の2つをあげておく。[3]

(5)　もちろんシーツと蒲団カヴァが新しければただ寝るだけの私にとって何ら不都合があるわけではなかったが、それでも窓の外に吹き荒れる嵐の音を聞いていると、なかなかランプの焔を吹き消す気にはならなかった。　（辻邦生「風塵」）

(6)　私は寝台にもぐりこんでから、ながいこと眼が冴えて眠れなかった。物が倒れる音、梢がざわめく音、雨戸が軋る音が、風雨にまじって聞えた。そのうち私は主人が誰かと話している声を階下のほうに聞いた。答えているほうの声は小さくて、ほとんど聞きとれなかったが、主人が、しきりと、道は暗くなかったか、とか、＊＊さんは元気だったか、とか尋ねる声が聞こえていた。部屋を歩きまわる足音が、コツコツと響き、おかしそうに笑う声も聞えたように思った。なにか主人の言う冗談に、夫人が笑っているに相違ないと思った。主人は夫人に食事を出しているらしく、皿やフォークのふれ合う音もした。　（辻、同前）

もちろん、この寺村の(3)の観察は、厳密な一般化を目指したものではなく、単におおざっぱな傾向を述べただけにすぎないが、この2つの例において知覚名詞が9つある中で、テイル形が1つしかないのに対しル形が8つもあるということは、この例に関する限りは寺村の観察があてはまるようにも思える。もっとも寺村は、(4) の名詞の種類が示すように、聴覚を表す名詞と視覚を表す名詞の区別はしていないが、この例においては知覚名詞は9つともすべて「声」や「音」という聴覚を表す名詞であり、結論を先取りすれば、このことが少からずル形が多用されていることと関係があるのである。

聴覚を表す名詞がテイル形よりはル形をとる傾向があることは他にも数多く見出され、枚挙にいとまがないといってもいいほどである。

(7)　電車の走る音が近くで聞こえた。

（松本清張『ゼロの焦点』: 119）

(8)　咳払いと、椅子の軋る音だけがときどき起る。

（松本清張『地の骨（上)』: 170）

(9)　ばたばたと人の動き回る足音も耳にしたような気もした。

（『地の骨（上)』: 289）

(10)　蛇口をひねったように水の流れる音がしてきた。

（『地の骨（上)』: 293）

(11)　鼻をかむ音がつづけて二、三度した。　（『地の骨（下)』: 18）

(12)　寝返りを打つ音がこちらにも何度か聞えた。

（『地の骨（下)』: 33）

(13)　玄関の戸があく音が聞えた。　（『地の骨（下)』: 219）

(14)　廊下を歩いてくる音がした。　（松本清張『眼の壁』: 247）

(15)　横の鳥飼重太郎の吐く息が三原に聞えた。

（松本清張『時間の習俗』: 304）

(16) 宗三がほっとした気持ちでいると、美奈子の泣くような、叫ぶような声が聞こえた。 (松本清張『内海の輪』: 127)

(17) ドアを叩く音が聞えた。

幸子は、胸がいちどきに鳴るのを抑えて、わざとゆっくりドアに行った。 (松本清張『夜光の階段（上)』: 377)

次は知覚動詞補文の例である。

(18) ただ、常務だけが、不満そうに何かつぶやくのが聞えた。

(『眼の壁』: 40)

(19) 雪がまた、大きく音をたてて落ちるのが聞こえた。

(松本清張『網（下)』: 249)

(20) 昌子は、耳の傍に雷鳴のとどろくのを聞いた。

(松本清張『山峡の章』: 271)

もちろん、この一方で、以下のようにテイルが用いられている聴覚名詞の用例も少からず見受けられる。

(21) 手帳を出して番号通りダイヤルを回すと、信号の音がしばらくつづく。寝静まった家の中でこのベルが容赦なく響いているかと思うと[4]、彼は心が臆した。しかし、今夜はどんなに遅くなっても訪ねなければならない。寝ている夫人が羽織りをひっかけて起き上がってくる様子が、規則的に鳴っている信号音の間に想像された。 (『地の骨（上)』: 19)

(22) 残り四人が玄関に向かい、主任の警部補がブザーをおした。奥でブザーの鳴っている音が聞えるのだが、だれも出て来る気配はなかった。 (松本清張『歪んだ複写』: 382)

(23) 女中は依然として寄りつかない。遠くの方で客の騒いでいる声がしていた。が、部屋の外の廊下には、人の足音もしなかった。

戸谷は、自分の言葉が成功しつつあるのを知った。膝の上に揃えている彼女の手を今すぐ取っても、拒絶されないだけの確信を持っていた。 (松本清張『わるいやつら(上)』: 77)

(24) あの不意の物音のあと、二、三人、このあたりをうろうろしている足音があったように思う。 (『地の骨(上)』: 292)

(25) 用をたして部屋に戻ろうとしたとき、道路を東方向に歩く人の足音が雨戸越しに聞えました。そのとき雨の音はしてなかったので、雨はやんでいたと思います。その足音というのは雨で濡れた道をピタピタと跌で歩いている足音でありました。

(松本清張『渡された場面』: 116)

(26) 道夫が部屋に戻って床に入ったのが一時すぎだった。

隣室で、シュッ、シュッと自転車のタイヤに空気を入れているような音が聞えた。安普請のアパートだから畳にひびく。

(『夜光の階段(上)』: 57)

次は知覚動詞補文の例である。

(27) わたしは、院長先生がそこにいらっしゃらないと思って電気掃除器を堤げて行ったのですが、階段を上ったところで、足がすくみました。婦長の中岡市子さんが大声で泣いているのが聞こえたからです。それはもう、身も世もないといった号泣でした。

(松本清張『黒革の手帖(上)』: 111)

とはいえこれまでの例からは、少なくとも、聴覚を表す名詞については、テイル形よりはル形がより多く用いられるとする寺村の観察がある程度の

一般化をとらえているとはいうことができるように思われる。しかし、この使い分けは単なる頻度の問題としてとらえるべきではなく、ルとテイルは何等かの原理に従って使い分けられているとする観点から考察すべきである。すなわち、ル形がより多く用いられることについては、聴覚という知覚の特性の観点から、また聴覚でテイルが用いられている場合には、ル形とは異なったコンテクストの特徴について考察すべきであろう。

まず、(7) ～ (20) のルが使用されている場合であるが、これらの例においてはほとんどがテイル形も容認されると思われるが、テイル形と比べた場合、ル形においては瞬時に聴覚でとらえた音をそのまま表しているといったニュアンスが感じられると思われる。

一方、(21) ～ (27) の例においても、ほとんどはル形も可能ではあると思われるが、テイル形においてはル形とは逆に、瞬時性ではなく、すでに生じている音を意図的な観察として提示しているといったニュアンスが感じられる。(もっともこのことについてはテイル形の観察の主は誰かという問題があるが、この問題については§2で改めてふれるとして、ここではとりあえず語り手としておく。)

例えば、(21) や (22) では、電話やブザーが「鳴っている」ことがすでに予想されるシチュエイションであり、この場合にはあえて「鳴っている」に焦点をおいて述べているといった語り手の意図といったものが感じられよう。(23) は、誰も部屋に寄り付かないことを予想してのまわりの状況の観察であり、(24) や (25) は、どのような音だったかを意図的な聴覚の観察として述べているといったコンテクストである。(26) は、ル形での瞬時的な音の知覚を表すコンテクストとしても可能であると思われるが、テイル形においては、どのような音かを観察の結果として述べているといったニュアンスが感じられる。(27) も、瞬時性よりは、すでに存在している音の観察として述べているようなコンテクストである。先にあげた (6) の寺村の唯一のテイルの例である「主人が誰かと話している声」

においても、瞬時的な知覚というよりは、すでに存在していた話し声に自分がやっと気づいたという「話している声」の客観的な提示に主眼があると思われる。

つまり、ル形とテイル形には聴覚における知覚の認知のあり方の違いが反映されているとはいえないだろうか。すなわちル形においては、知覚者の意識の濾過を経ていない聴覚でとらえた、そのままの知覚の表出が表されているのに対し、テイル形においては、知覚の対象の存在をいわば前提とした上での知覚者の意識の濾過を経た、事実確認的な聴覚の観察結果が表されているということができよう。[5] 以下、ルのような単なる知覚者の「知覚の表出」としての知覚のあり方を「知覚」、テイルのような語り手の「事実確認的な観察」としての知覚のあり方を「観察」ということにする。[6] (25) の「歩く人の足音」と「歩いている足音」では同じ「足音」に対する「知覚」と「観察」の使い分けが感じられよう。前者は聴覚に感じたままの音であるのに対し、後者は、足音そのものの存在を前提とした上で、それがどんな音だったかの観察の結果としての記述である。よって、とりあえず、聴覚を表すル形、テイル形について、次のような仮説を設けることにする。

(28) 現場での音を知覚者の「知覚」としてそのまま伝えるコンテクストではル形を用い、現場での音を語り手の「観察」の結果として提示するコンテクストではテイル形が用いられる。

さて、これまで、聴覚による知覚の例においては、テイルの「観察」よりは、ルによる「知覚」のほうがより多く用いられていることを見てきたが、このことについては、次のようなことが考えられると思われる。まず、聴覚という行為は現実に生じている音に耳を傾けるという行為であるが、現実世界においては、聴覚が問題とするような音は絶えず存在していると

いうよりはむしろ、突然に発生するものであり、その突然の音の発生と同時に聴覚が働く場合が一般的といえよう。よってこの場合は、瞬時的な知覚となり、いきおい、事実確認を経る以前のル形の表す「知覚」の表出として表さざるをえないということになると思われる。

一方、視覚による知覚の場合においては、聴覚の場合とは逆に、頻度においてはテイル形のほうがはるかに多いといえる。まず視覚を表す知覚名詞のテイルの例を見てみることにしよう。

(29) 木村は室内の後方に立って、机にうつむいたり、司書から本を借りだしたり返したりしている人々を熟視したが、日本人は一人もいなかった。 (松本清張『詩城の旅びと』: 281)

(30) 彼らは道端の木陰に佇んでいる竜夫と典子をじろじろと見て通った。 (松本清張『蒼い描点』: 145-146)

(31) 典子は、汗をふいている竜夫を見た。 (『蒼い描点』: 178)

(32) 内をのぞき、うずくまって泣いている青年の丸い背中を見ると、「坂本くんか」としぼるような声で呼んだ。 (『蒼い描点』: 510)

(33) 社長は頭をかかえた。その様子は、わなに落ちこんでもがいている姿にみえた。 (『眼の壁』: 38)

(34) 昌子は、部屋の入口でにやにや笑って立っている妹の顔を見つめた。 (『山峡の章』: 79)

(35) 怜子は、姉の考えている顔をじっと見て言った。 (『山峡の章』: 108)

(36) 首をかしげて突立っている道夫の姿が眼に見えるようであった。 (『夜行の階段（下）』: 123)

次は知覚動詞補文の例である。

(37) 車内に蒼白い外光が射しているのを見た。(『ゼロの焦点』: 43)

(38) 車が社の前に着くと、崎野竜夫が玄関の横で煙草をくわえてぶらぶらしているのが見えた。(『蒼い描点』: 79)

(39) 小野喜久子がアパートの表に待たせた車に乗って去って行き、その白い埃が舞っているのを窓から見ながら、昌子は言いようのない空しさを覚えた。(『山峡の章』: 96)

(40) そのとき通子は近くの灌木の茂みに白い物がはさまっているのを見た。(『詩城の旅びと』: 457)

(41) 交通係長は、花束を抱く山内みよ子が下の道路にむかって手を合わせているのを見た。(松本清張『十万分の一の偶然』: 41)

もちろんこれらの例の中には、ル形が可能なものもあるが、テイル形においては、瞬時性の動作ではなく、すでに進行している動作の、あるいは、すでに生じている状態の提示に焦点があるように思われる。視覚においてテイル形が多いことについては、聴覚の場合とは異なって、視覚の対象となるものが突然に生じ、それと同時に視覚行為がはじまるというよりは、視覚行為がはじまる段階で、すでに、視覚対象が存在している場合が多く、よって、視覚対象をいきおい事実確認的な「観察」としてとらえる傾向になるためと思われる。

もちろんその一方で視覚において、ル形が用いられている例も少からず見受けられるが、この場合においては、視覚の対象となる事態が瞬時的なもので、事態の発生と視覚行為が同時であり、テイルの「観察」としてはとらえられず、ル形の「知覚」としてしかとらえられないことがはっきりしていよう。[7]

(42) 舟坂英明が地下の一室にとび込むのが眼にはいった。

(『眼の壁』: 404)

(43) その隅で日焦けしたラテン系の男が三人、アコーディオンを肩に吊っていたが、木村、柏原、それに久里子の三人が通りかかるのを見ると、急いで合奏しはじめた。 (『詩城の旅びと』: 112)

(44) 刑事が若いほうにそれを大事そうに手渡すのを見て、小宮は言った。 (『詩城の旅びと』: 337)

(45) 木村にも白いフィアットが百五十メートル先で急角度で右折するのが見えた。 (『詩城の旅びと』: 447)

(46) 数秒も経たないうちに、うしろの高速道路のあたりから火柱が立ちのぼるのを見ました。 (『十万分の一の偶然』: 12)

(47) うす暗い道路に立つ楢林も悪態を呟いたが、元子が帯びの間に手帖を仕舞うのを見て、「ほんとに投書するのかい？」と、眉を寄せるようにしてきいた。 (『黒革の手帖（上)』: 159)

次の2つの例文には、「知覚」としての「動く」と、「観察」としての「動いている」の違いがみてとれよう。

(48) 運転手が車のドアを開けるために動くのがみえた。 (『眼の壁』: 55)

(49) 典子も窓の下を見た。下の人間の姿が小さく動いているのを見ると、ぞっとした。 (『蒼い描点』: 51)

「動く」においては視覚対象となる事態と視覚行為が同時発生であるが、「動いている」では、視覚行為以前に「動いている」という事態はすでに存在しているのである。

また、次の4つの例文の知覚の対象は4つとも「笑ウ」であるが、視覚と聴覚の違いがテイル形とル形の違いとなって現れていると考えられないだろうか。[8]

(50) まだ七十万円は確実に入っていた。彼にはいまごろその金を握って嗤っている泥棒の様子が映った。 (『地の骨(下)』: 174)

(51) 稲木は何にも気づかなかった様子で、レジで勘定を払い、表のドアを押して悠々と出て行った。なんだかその背中がせせら笑っているようにみえた。 (『地の骨(下)』: 366)

(52) あのころは何とかして啓子を得ようとして懸命になったのだが、自分が真剣になればなるほど、二人にとっては喜劇役者に見えたであろう。川西は、啓子と稲木とが声を揃えて笑うのが耳に聞こえるようだった。 (『地の骨(下)』: 337)

(53) 田村は汗にぬれて出た。後で、舟坂英明のわらう声が聞えそうであった。 (『眼の壁』: 251)

まずこの4つの例についていえることは、(50)と(51)の視覚を表す場合には、ル形にするとやや不自然な印象を受けるのに対し、(52)と(53)の聴覚を表す場合には、テイル形も可能ではあるが、テイルにすると知覚主体の聴覚の鮮度がいささか弱まった印象を受けるということである。もちろん、これには、「笑ウ」という動詞の意味特徴、視覚と聴覚の知覚の認知のあり方、ル形とテイル形の働きといったものが、それぞれ相互に係わりあっていると思われるが、少なくとも次のようなことがいえるのではないだろうか。

まず、聴覚の場合、テイル形では鮮度が薄れた印象があるということについては、言い換えれば、知覚者が音を受けるインパクトがテイル形では弱くなるということであると思われるが、これは、「知覚」を表すル形は、瞬時的な解釈が可能であり、このことが、より直接的なインパクトの大きいものとなりうるということなのではないだろうか。また、視覚を表す(50)と(51)では、なぜ、ル形が不自然であるかということについては、

「笑ウ」という動作が、「知覚」として、すなわち、(42) ～ (48) のような瞬時的に完結する事態としては、受けとめにくいということが係わっているのではないだろうか。

それゆえ、もし、瞬時性が感じられるコンテクストでは、視覚においても、ル形の「笑う」が自然に用いられるのではないかと予想されるが、次の (54) は、そのような例であると思われる。

(54) つれの中年男が、レジで勘定を払っている。その肩がいかつい。
あの女は、水に落ちた牝犬だ。――元子は、こんどは声をだして笑った。
急なことなので、島崎すみ江がびっくりして笑う元子を眺めた。
(『黒革の手帖 (上)』: 245)

もっとも、この問題については、更なる考察が求められよう。

また、知覚のなかには、「おぼえる」「感じる」といった体全体としての感覚を表す、体覚ともいえるものもあるが、このような場合においても、おしなべて感覚の対象となる事態の発生と感覚行為が同時発生なため、ル形が用いられることが多い。[9]

(55) すると、風が――風ともいえない冷たい空気の流れが顔に当るのをおぼえた。 (『地の骨 (下)』: 173)

(56) 竜雄は、突然、頭にひらめくものを感じた。 (『眼の壁』: 383)

(57) 足もとに旋風が舞うのを木村はおぼえた。
(『詩城の旅びと』: 414)

(58) 社長はメモに眼を落とした瞬間、あたりが昏くなるのをおぼえた。
(松本清張『黒い空』: 302)

(59) 戸谷は、全身が黒い穴の中に落ち込んで行くのを感じた。

（『わるいやつら（下）』: 367）

(60) 貴重な青春が崩れ、砂のように粉々になって指の間から落ちるような感じがした。（『山峡の章』: 84）

(61) その頭の中をひときれの雲の影が過ぎるのを感じた。（『十万分の一の偶然』: 169）

これに対して、テイルが用いられる例においては、意識的な観察、感覚の意図性が感じられよう。もちろん、この場合においても、観察の主体は語り手であると思われる。

(62) 寒い日だし、粉雪が斜めに皮膚に当たっていたが、禎子の頬は熱いものに触れているように感じられた。（『ゼロの焦点』: 267-268）

(63) 暗い中にも黒いかたまりが動いている感じであった。（『蒼い描点』: 499）

(64) 「お姉さま、お痩せになったわ」
怜子は、昌子の顔をのぞくようにして言った。それが昌子の生活をのぞいているような感じだった。（『山峡の章』: 37）

(65) このとき、昌子は原因もわからない漠然とした不安が、自分の周囲に風のように舞い立っているのを、ふと、感じた。（『山峡の章』: 103）

よって、聴覚を表すル形とテイル形の使い分けについて先に述べた仮説(28)は、視覚や感覚においても有効であるということになり、よって、次のようにまとめられよう。

(66) 知覚対象を「知覚」としてとらえる場合はル形が用いられ、「観

察」としてとらえる場合は、テイル形が用いられる。

1．2．さてこれまで考察してきたのは、もっぱら、知覚する主体の基準となる視点の位置が固定している場合であったが、知覚主体の視点の位置が移動すると考えられる場合もあり、このことについてはまた別な観点からの考察が必要になると思われる。知覚主体の視点の移動が生じるのは特に乗物に乗って外の景色を見るような場合であるが、知覚主体が移動することによって、視点の軸となる基準時がなくなるため、いきおい、視覚に映じるままに述べることになり、結果的に、視覚の対象となる事態の発生と視覚行為が同時となり、視覚対象の事態が瞬時的でないにもかかわらず、「知覚」を表すルが用いられることになる。次がそのような例と考えられる。[10]

(67) 方々で窓の遮蔽があけられていて、白いものが走っているのが斜めに見えた。禎子も紐をひいた。音立ててブラインドがはねあがり、流動する風景がひらいた。 (『ゼロの焦点』: 43)

(68) 吊革にぶら下がって、無心に窓外を流れてゆく光景を眺めた。 (『眼の壁』: 94)

(69) ミラボー通りの並木通りが流れるのを見ながら木村は考えた。 (『詩城の旅びと』: 415)

(70) ごとんと車がとまった。抱え上げられた。いままでベッドと思っていたのは担架だった。……天井の、うす暗い灯がつづくのがぼんやりと見えた。病院の廊下のようだった。 (『黒革の手帖（下）』: 318)

もっとも、知覚主体が移動する場合、すべての知覚対象がル形になるとは限らない。ル形かテイル形かの厳密な基準はあるはずもなく、あくまで、

知覚主体と対象物との相対的な位置関係によると思われる。(67) では、同じ移動する車中での描写でありながら、「走っている」「流動する」とテイル形とル形が用いられているが、「走っている」については、視覚の対象である「白いもの」をすでに存在している静的なものとしてとらえているのに対し、「流動する」については、「音立ててブラインドがはねあがり」の描写からわかるように、外の景色を瞬時的な「知覚」の用法としてとらえている。また、次の (71) では知覚主体が移動しているにもかかわらず、やはり、テイルが用いられているが、これは、窓からの眺めに急な変化はなく、対象を「観察」できる位置にあるものとしてとらえていることを示していよう。

(71) 二人は、伊吹山が走っている大きな窓を正面にして腰を下ろした。
(『内海の輪』: 57)

また主人公の視覚行為がテイル形で表されると、視覚対象となる事象に静的なテイルでなく、動きの感じられるルが用いられる例がみられるが、これは視覚が持続行為を表す場合は、幅のある時間でもって視覚の対象をとらえることになり、いわば、移動する知覚主体の場合のように、視覚対象の事態の進展と視覚行為が同時に進行することになり、視覚対象が瞬時的でないにもかかわらず、「知覚」としてとらえられることになるためと考えられよう。[11]

(72) 部屋の隅で帯を結ぶ彼女のうしろ姿を稲木は陶然と眺めていた。
(『地の骨 (上)』: 344)

(73) 典子は、自動車が速度を抑えて旋回し下降するのを眺めていた。
(『蒼い描点』: 519)

(74) 昌子は、夫がネクタイをゆるめる動作を見ているうちに、かすか

な退廃といったものを、その様子に感じた。（『山峡の章』: 65）

(75) 昌子は、移り変わる渓谷の風景を、ぼんやり眺めていた。
（『山峡の章』: 289）

(76) 木村は、アルバロンの朝霧の這う中で葦を切る二人の人影を眼に浮べていた。（『詩城の旅びと』: 267）

(77) 伊佐子が離れたところで障子の傍に立ち雪の降るのを見ていると、信弘は、ばさりと新聞を繰って、「あのなあ」と、少し遠慮がちな調子で妻に云いかけた。（松本清張『強き蟻』: 37-38）

(78) バック・ミラーで追いつくのを眺めているのがよく分った。
（『強き蟻』: 173）

(79) 佐伯は眼をすぼめて、煙の先が消えた天井の電燈のシェードにまつわるのを見ていた。（『強き蟻』: 302）

次は、テイルが聴覚の持続行為を表し、ルが聴覚の対象に用いられている例である。

(80) 三分間ばかりラジオの音楽が流れるのを聞いていた。
（『眼の壁』: 44）

(81) 大友は椅子にかけてうすら笑いを浮かべながら、自分もいっしょに小野喜久子の言うのを聞いていた。（『山峡の章』: 358）

(82) 田原は時枝の言うのを聞いて考えていたが、ぱっと目を見開いた。
（『歪んだ複写』: 353）

先の（6）（＝83）の寺村の例にも、聴覚の持続行為と考えられる例がある。

(83) ……それでも窓の外に吹き荒れる嵐の音を聞いていると、なかな

かランプの焔を吹き消す気にはならなかった。

このようなル形には語りの現場のリアルタイムの時の流れを感じるが、この場合、現場での時は、事態の動きとともに、進行しているのであり、語りの基準時は介入しえないのである。

もちろん、知覚行為が持続のテイル形のときは知覚対象はすべてル形になるというのではない。次は知覚対象にテイルが用いられている例であるが、この場合においては、いわば静止画像を時間をかけて見ているといったニュアンスが感じられよう。この場合においても知覚行為は進行するが、知覚対象となる事態そのものは進展せず、あくまで静的に「観察」としてとらえられたままなのである。

(84) 竜夫は、やはり腕組みしたまま、かなり急な早さで流れている水の上を見ていたが、「この川は深いだろうか、浅いだろうか？」とひとり言のように言った。 (『蒼い描点』: 428)

(85) その和栄新聞社の木村信夫が、中年の肥ったフランス人とテーブルで話しているのを、通子の双眼鏡はさっきから捉えていた。 (『詩城の旅びと』: 294)

(86) 看護婦が受話器を取って聞いているのを、戸谷は身じろぎもしないで横から見つめていた。 (『わるいやつら（下）』: 37)

(87) 彼は座っている位置から、自分の伝票と通帳とを取って、帳簿を開いている男に視線を向けていた。 (『わるいやつら（下）』: 312)

(88) 元子はそう思って、眼の前で肩を震わせている波子を微笑で見つめていた。 (『黒革の手帖（上）』: 206)

1．3．さてここで、先に§0で述べた（1）（＝89）の英語の知覚構文の

日本語訳であるル形とテイル形に話をもどすと、この「渡る」と「渡っている」についても、「完了」・「進行中」よりは、「知覚」・「観察」としてとらえるほうが、より射程の大きな分析であると思われる。

(89) a．私はジョンが通りを渡るのを見た。
b．私はジョンが通りを渡っているのを見た。

つまり、「通りを渡る」が表す「完了」とは、事態の発生してから終了するまでと視覚行為が平行的であるということで、このような同時性は「知覚」としてとらえられる性質のものである。現実的には、ほぼ一瞬にして、事態が発生して終了する瞬時的な動作であることが多い。また「通りを渡っている」のテイルの「進行中」が表す知覚の対象は、すでに「渡る」という動作が進行していることから「観察」に相当することになると思われる。それゆえ、具体的なコンテクストでは、ル形が用いられるかテイル形が用いられるかについては、渡る通りの大きさが、少なからず、係わってくるのではないだろうか。[12]

(90) 私はジョンがラーメン横丁の小さな小路を { 横切る / (?) 横切っている } のを見た。

(91) 私はジョンが大通り公園を { (?) 横切る / 横切っている } のを見た。

とはいえ、コンテクストによっては、このような例も容認される場合もあるかもしれないが、一般的には、大通り公園のような広い通りを、わずかな時間で横切るのを見るのは不自然であるように思われる。もっとも、視覚行為が持続を表す「見ていた」であれば、「横切るのを見る」ことも

容認されよう。

(92) 私はジョンが大通り公園を横切るのを見ていた。

少なくとも、この場合においては、従来の分析では、「横切る」のル形は「完了」を表すと同時に「進行」状態をも表すということになりかねないが、本稿の分析では、ル形は事態の進展と視覚行為が同時である「知覚」を表すと説明されよう。

もっとも「横切るのを見ていた」においては、「横切る」がすべて「完了」を意味するとは限らない。

(93) 私がジョンが大通り公園を横切るのを見ていると、後ろから背中を叩かれたので、思わず振り向いた。

このような例においては、「横切る」行為は「完了」していないといえよう。しかし、この場合においても、「横切る」は「知覚」を表しているとはいうことができるのである。

同じように、聴覚の場合においても、「完了」・「進行中」という概念で、ル形、テイル形を説明しようとすると、いささか不自然となる場合がでてくる。例えば、次の例をみてみよう。

(94) a. 風船が割れる音がする。
b. 風船が割れる音がした。

澤田（1994：17）は、「音がする」というのは継続的な知覚を表すゆえ、(94a) では、割れる風船の個数は複数であるが、(94b) では、複数でも単数であってもかまわないとしている。

(95)　a．風船が次々と/*一個割れる音がする。

　　b．風船が次々と/ 一個割れる音がした。

つまり、「割れる音」は、(94a) では「完了」よりはむしろ「進行中」を表し、(94b) は、一個が割れる「完了」の意を表しうるということになる。そうすると、この場合、ル形は、「完了」と「進行中」という異なったアスペクトを表すことになってしまうが、これが不自然であることはいうまでもないことである。(94a) と (94b) の「割れる音」はあくまで本質的に同じものととらえるのが直感に則した分析だからである。更には、(95a) は、次の (96) とどのような違いがあるのかという問題もある。

(96)　風船が次々と割れてる音がする。

もし、(95a) を「進行中」とし、(96) も従来の分析に従って、「進行中」とすると、(95a) も (96) も共に「進行中」を表すということになって区別がつかなくなってしまおう。このようなル形とテイル形の違いは、まさに、「知覚」か「観察」かの問題に他ならないといえよう。

更には、本稿で論じた、「移動する知覚主体」におけるル形の表す知覚対象も、「完了」といった概念では説明できないと思われる。また、従来の分析では、「進行中」を表さないテイルの用法、すなわち、状態表現のテイルをどのように扱うのかという問題もでてこよう。つまり、ル、テイルが、知覚対象そのものの「完了」や「進行中」といった事態のあり方を表すのではなく、知覚主体の対象に対する知覚的な把握の仕方が、ル、テイルによって示されているのである。確かに、(1) のように、知覚補文におけるル形とテイル形の違いを「完了」と「進行中」でとらえることのできる例もあるが、それは、限られた例であり、その分析も、本質的な違い

をとらえたものではないということになろう。

本稿では、もっぱら、知覚構文であることがはっきりしている例、すなわち、知覚名詞や知覚動詞が現れている例のみを扱ってきた。しかし、知覚名詞や知覚動詞は表面には現れていないが、ル、テイルが知覚を表しているととらえることのできる例もあり、そのような場合については澤田(1997)の問題点も含めて次号で扱うことにする。

－注－

(1) 本稿で述べた日本語の知覚構文におけるル、テイルについての考えが、どこまで英語の知覚構文の原形不定詞と現在分詞の働きにあてはまるかという問題がある。このことについては今後の課題としたいが、「知覚」と「観察」の概念がそのまま、英語の原形不定詞と現在分詞にあてはまらないことも確かである。というのは、「ル」・「テイル」と、「原形不定詞」・「現在分詞」は一対一の対応関係にはないからである。英語の知覚補文の現在分詞に対し、日本語では、テイル形ではなくル形が用いられる例は、次のように数多く見出だされる。ただし、逆の例、すなわち、英語の原形不定詞にテイルが用いられている例はないように思われる。(以下の用例は、すべて、垣田直巳編『英語指導法ハンドブック5〈英文用例編〉』(1989) 大修館書店からの引用である。)

a. I saw Peter coming and rushed up to him.
(ピーターがやって来るのが見えたので、急いでかけ寄った。)

b. Just as I arrived, I saw the train pulling away.
(私が着いたとたんに、列車が出て行くのが見えた。)

c. When I saw the rock falling I cried out as loudly as I could.
(岩が落ちて来るのが見えたとき、私は声を限りに叫んだ。)

d. As we sat round the campfire we could see sparks rising into the night air.
(キャンプファイアーを囲んで座っていると、火の粉が夜空に立ち昇っていくのが見えた。)

e. He observed a man leaving by the rear door.
(一人の男が裏口から出て行くのを目撃した。)

f. As I lay in bed I could hear the waves breaking on the shore.
(ベッドで横になっていると、波が岸辺に打ち寄せる音が聞こえてきた。)

g. I heard him going down the stairs.
(彼が階段を降りて行く足音が聞こえた。)

h. I think I heard a plane taking off.
(飛行機が離陸する音がしたように思う。)

i. I felt the car losing speed.
(車のスピードが落ちていくのを感じた。)

ただ、英語の現在分詞に対して日本語がル形になっている動詞は、「行く」「来る」といった移動の方向を表すものがほとんどであるということは注目してよいだろう。

(2) 「知覚」と「観察」のアイデアは、すでに尾野（1999a）で述べられている。

(3) ちなみに、あとの2つは次の例文である。

・陽灼けした真黒な顔を見せながら、ホテルの門を入って来る小杉の姿が清子の眼に入って来た。小杉は初め清子の立っている姿にひどく驚いたらしかったが……

・彼は移り行く窓外の風景ばかりを見詰めていた。

この二つの例文は、共に、視覚を表してるが、ルとテイル、どちらも本稿での「知覚」と「観察」で説明できよう。また「入って来る小杉」といった、視覚を表す名詞と共に用いられる「来る」・「行く」の例は、頻繁に見受けられるが、先の注(1) の英文用例の現在分詞に相当するル形も含めて、これは、運動の開始点が「知覚」としてとらえられるためかもしれない。

(4) テイルがすべて語り手の視点を表しているわけではなく、「と」節には、語り手の視点は入り込めず、ここでのテイルは登場人物である「彼」の視点である。このことについては、尾野（1999 : 94）を参照のこと。

(5) 本稿では、テイルの分析については、「て（＝た（確述意識））」＋「いる（存続）」の説を採用する。またタとルについては尾野（1998）（1999b）を参照のこと。

(6) 「表出」と「事実確認」の用語は、工藤（1995 : 189）による。もっとも、工藤は、「表出」はル・テイルの非過去形に、「事実確認」はタ・テイタの過去形に用いている。

(7) 知覚構文であることがはっきりしている文において、視覚を表す知覚名詞にル形が用いられている例は、注(3)の「入って来る小杉」といった例を除けば、きわめて少ない。本文の(54)は、数少ない例の一つといえる。また視覚を表す知覚動詞補文に現れる動詞の特徴として、瞬時性が求められるため、次の例のように、視覚対象がかなり時間のかかる限界的事象を表す場合は容認されない。

・??太郎には大工が家を建てるのが見える。　（町田 1989 : 104）

(8) 「泣ク」の場合の、ル形とテイル形の容認性やニュアンスの違いについても同じようなことがいえる。

a．太郎は花子が { ? 泣く / 泣いている } のを見た。

b．太郎は花子が { 泣く / 泣いている } のを聞いた。

すなわち、「泣ク」を視覚対象としてとらえた場合、「泣ク」をル形の表す「知覚」としてとらえること、すなわち、「泣ク」という行為を瞬時に完結するものとしてとらえたり、あるいは、「泣ク」という行為の開始点をとらえたりすることはきわめて不自然であり、それよりは、「泣ク」という行為がすでに生じているものとして、すなわちテイルの表す静的な「観察」としてとらえるほうが自然であるといえる。もっとも、瞬時性の解釈が可能な次のコンテクストではル形も容認されよう。

c．そのとき太郎は、それを聞いた花子が急に泣くのを見た。

一方、「泣ク」を聴覚対象としてとらえた場合は、太郎自身の直接の知覚を表すのは、ル形のほうであると思われる。普通、「泣ク」という行為を聴覚の対象としてとらえた場合も、瞬時的なものではなく、少なからず持続するものとしてとらえるほうが自然であると思われるが、聴覚においては、視覚の場合とは違って「泣ク」という行為の開始点を「知覚」としてとらえることは比較的自然であるといえる。また、持続する音を聞き続けることを表す場合には、持続する音と同時に聴覚行為も進行することになるが、この場合も、おのずと「知覚」を表すル形が用いられることになると思われる。つまり、視覚においては、静的な対象を持続して見ることは可能であるが、聴覚においては、基準時のみに成立する静的な音を持続して聞くことは考えられず、よって、聴覚対象も動的なものを表すル形のほうがふさわしいということになるのではないだろうか。

(9) 次の例におけるルも、「知覚」を表すル形の観点から説明できるかもしれない。

・川から吹きあげる風が冷たかった。（『ゼロの焦点』: 59）

・畑から吹く風が溢れこんでいる。（『時間の習俗』: 309）

・夜の海から吹きつける強風が恭介の足もとをよろめかせた。（『十万分の一の偶然』: 249）

(10) これらのル形は山梨（1995 : 212）が、「認知主体の視線の動きではなく、〈主体自身の動き〉が問題になっている」といった表現と考えられる。山梨はこの例として次のような例をあげている。

・ルツェルンでアプト式電車に乗りかえてから、風景は一変した。左右に山がせまって来た。　（新田次郎：『アルプスの谷アルプスの村』：13）

・トンネルを一つずつくぐるたびに山が近くなっていく感じが濃厚になってくる。

もっとも、山梨は「せまって来た」と「近くなっていく」を同種の表現とみなし、ルとタの区別をしていない。しかし、ルとタは、認知の仕方においてはっきりした違いがあるとすべきであろうと思われる。タについては、尾野（1998）（1999b）を参照のこと。

(11) 次の二つの例を見てみよう。

a．多摩川の鉄橋を渡るころ、川の中では人間やボートが浮かんでいるのが見えた。　（『蒼い描点』：5）

b．戸谷は、暗い湖面に浮ぶボートの灯を見凝めていた。　（『わるいやつら（下）』：135）

aとbは、共に、似たような状況であるが、bにおいて「浮かぶ」とル形になっているのは、文末が「見凝めていた」とテイル形になっていることと少なからず関係があるかもしれない。

(12) 英語の典型的な知覚構文としてしばしば引用される、§0で述べた、“I saw John cross(ing) the street.”の英文においても、原形が用いられるか、現在分詞が用いられるかは、“the street”の幅が、少なからず、係わってくる問題であるようにも思われるが、このことは、何等、議論の対象にはなっていないようである。

用例出典

松本清張『地の骨（上）（下）』　（新潮文庫）新潮社　1975
松本清張『わるいやつら（上）（下）』　（新潮文庫）新潮社　1966
松本清張『ゼロの焦点』　（新潮文庫）新潮社　1971
松本清張『時間の習俗』　（新潮文庫）新潮社　1962
松本清張『目の壁』　（新潮文庫）新潮社　1971
松本清張『渡された場面』　（新潮文庫）新潮社　1976
松本清張『蒼い描点』　（新潮文庫）新潮社　1959
松本清張『歪んだ複写』　（新潮文庫）新潮社　1966
松本清張『黒革の手帖（上）（下）』　（新潮文庫）新潮社　1983
松本清張『夜光の階段（上）（下）』　（新潮文庫）新潮社　1985
松本清張『詩城の旅びと』　（文春文庫）文藝春秋　1992
松本清張『十万分の一の偶然』　（文春文庫）文藝春秋　1984

松本清張『強き蟻』　（文春文庫）文藝春秋　1974
松本清張『黒い空』　（角川文庫）角川書店　1990
松本清張『山峡の章』　（角川文庫）角川書店　1976
松本清張『内海の輪』　（角川文庫）角川書店　1974
松本清張『網（下）』　（光文社文庫）光文社　1984

参考文献

安藤貞雄（1986）.『基礎と完成　新英文法』数研出版.
尾野治彦（1998）.「瞬時的発話における「ル」形と「タ」形の使い分けについて－認知のあり方をめぐって－」『北海道武蔵女子短期大学紀要』第30号，31-74.
_____（1999a）.「ノデ節、カラ節のテンスについての覚書き－岩崎の「主節時主語主語視点」をめぐって－」『北海道武蔵女子短期大学紀要』第31号，51-97.
_____（1999b）.「認識・発見文における「ル」形と「タ」形－新獲得情報の処理のあり方をめぐって－」『英語学と現代の言語理論』（葛西清蔵編著）北海道大学図書刊行会，89-99.
工藤真由美（1995）.『アスペクト・テンス体系とテクスト－現代日本語の時間の表現－』ひつじ書房.
澤田治美（1994）.「知覚を表す法助動詞 can の意味論－話し手の心的態度を中心として－」『英語語法文法研究』創刊号，7-20.
_____（1997）.「日本語知覚補文のテンスの解釈」『日本語文法　体系と方法』ひつじ書房，23-37.
曾我松男（1984）.「日本語の談話における時制と相について」『言語』4月号，120-127.
寺村秀夫（1984）.『日本語のシンタクスと意味　第Ⅱ巻』くろしお出版.
町田　健（1989）.『日本語の時制とアスペクト』アルク.
山梨正明（1995）.『認知文法論』ひつじ書房.